巻頭言

国立保健医療科学院
院長　曽根智史

国立保健医療科学院設立20周年記念誌をお届けする．

この20年の間，厚生労働省や全国の地方自治体，地元の和光市・埼玉県，関係団体，職能団体，大学・研究機関，関連学会の皆様など，多くの方々に支えていただいたことに，心より感謝申し上げる．特にこの間，本院で研修を受けてくださった全国ののべ5万5千人の皆様に，深く御礼を申し上げる．

また，初代小林秀資先生，第二代篠崎英夫先生，第三代林謙治先生，第四代松谷有希雄先生，第五代新村和哉先生，第六代福島靖正先生，第七代宮嵜雅則先生の院長経験者をはじめ，当院を内側から支えてくださった科学院の旧職員の皆様とすべての現職員に改めて御礼を申し上げる．

本20周年記念誌は，2022（令和4）年12月15日に当院講堂およびオンラインで開催された「国立保健医療科学院設立20周年記念式典・記念シンポジウム」の内容を中心に編纂したものである．また，当日は時間の関係で発表することができなかった統括研究官，部長，センター長も「科学院の現在」として，調査研究等について執筆した．さらに，設立11年目以降の組織，人事，研修の変遷，年表については，総務部により記録としてまとめられた．

この20周年記念誌を読むのは，現在，当院や公衆衛生に関わっている方よりも，むしろ10年後，20年後の方かもしれない．私も公衆衛生の総論的な話をする場合，旧国立公衆衛生院や旧国立・医療病院管理研究所の周年誌を何冊も参考にして，資料を作成した．当院に限らず，組織というのは歴史が重要である．なぜ国立保健医療科学院という名前になったのか，なぜこのような組織体制になったのか，なぜこのような研修をこのような形で実施しているのか，なぜこのような研究や事業を実施しているのか等々，現時点の一断面を見ているだけではわからないことも，歴史や経緯を紐解けば答えが見えてくるし，それによって現在実施している研修，研究や事業の意義をより深く理解することができる．さらに自らが国立保健医療科学院で働く意味や立ち位置も時の流れの中で理解することができるだろう．

フランシス・フォード・コッポラ監督の映画「ゴッドファーザー」（1972年）に，古参の幹部が，目下のトラブルについて，若きマイケル・コルレオーネに，”These things have to happen every five, ten years.”，だから気にするな，という調子で話しかける印象的なシーンがある．そう，大変な出来事は，5年や10年に1回は起こるもの．そしてそれは，過去の出来事の帰結かもしれないのだ．

式典挨拶や講演でも述べたが，この20年間は，移転再編しての新組織発足，事業仕分けとそれに伴う組織・研修再編，さらに東日本大震災や新型コロナウイルス感染症への対応など，決して平坦な道のりではなかったと思う．次の出来事が何なのか，いつ起こるのか，予測がつかない部分もあるが，大切なのは，どのようなことが起こっても，それに適切・迅速に対処できる組織力を作っていくことだろう．私はそれを「底力」という言葉で表している．その底力をつけるためには，常にコアとなる考え方をしっかり持っておくことが重要である．私は，それを「内なるスタンダード（内部規範）」と呼んで，講義でも話している．内部に確固たるスタンダードを持つことで，外部要因にいたずらに左右されず，かつ変化に対応できる自分を持つことができるのである．

科学院という組織にとっては，「公衆衛生マインド（Public Health Mind）」がその内なるスタンダードの一つではないだろうか．研究でも研修でも，あるいは事業や組織運営においても，「公衆衛生マインド」を堅持

し，周囲に伝えていくことが，私たちのミッションでありアイデンティティである．それがまた「底力」を高め，わが国の公衆衛生に貢献し続けていくエンジンとなるのだと思う．

この20周年記念誌を読んでいる10年後，20年後の方々にお伝えしたい．「私たちは20年でここまで来ました．皆さんはどのような困難に直面して，それをどう乗り越えてきましたか．ぜひそれを周年誌という形で記録に残してください．そして，公衆衛生マインドを持ち続けていることを示してください．」と．

最後に，本記念誌の発行に際して，ご尽力いただいた執筆者の皆様，「保健医療科学」編集委員会及びその事務局の皆様に厚く御礼を申し上げる．